

高温・少雨に伴う当面の農作物管理対策について

気象災害対策 R 4 - 3
令和 4 年 6 月 2 9 日
農林総合研究センター

I 気象の概況

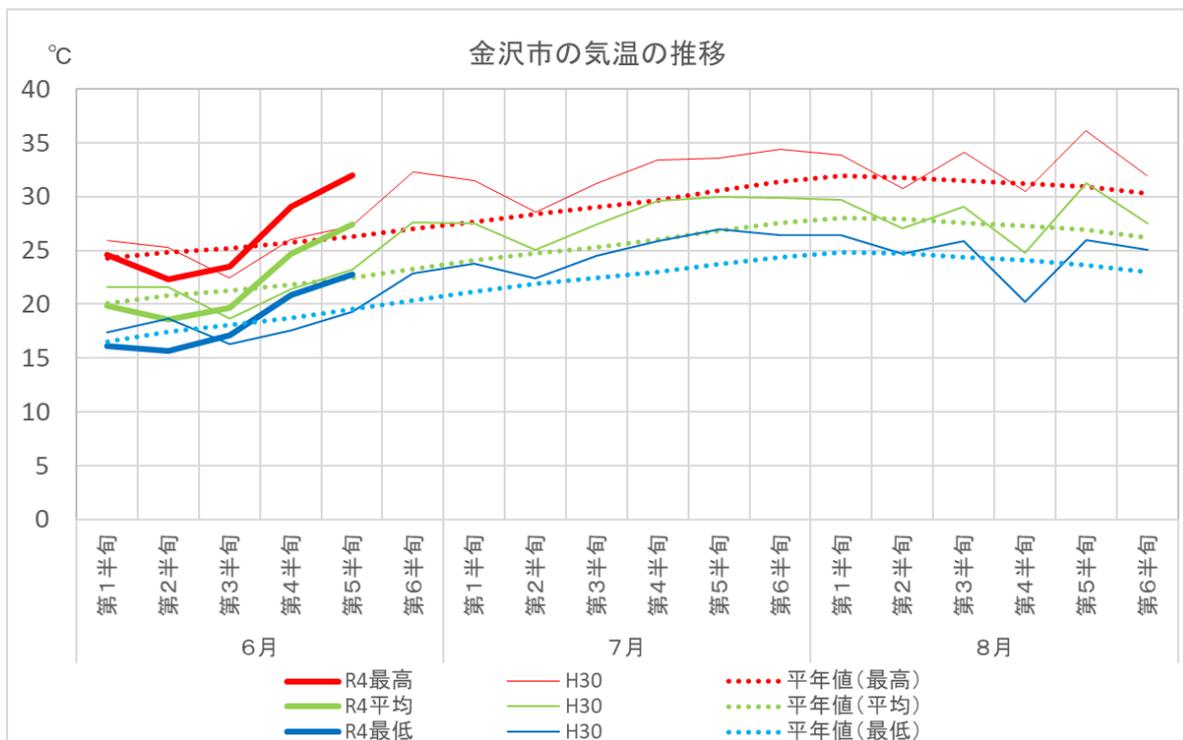
気象庁から 28 日午前 11 時に「北陸地方が梅雨明けしたとみられる」と発表がありました（このまま確定すれば統計を取り始めた昭和 26 年度以降、最も早い梅雨明け、平年比 25 日、前年比 16 日早い）。

新潟地方気象台発表の 1 カ月予報によれば、6 月中旬以降続く高温・少雨は今後も継続することが予想されています。

石川県では、記録的な速さで 7 月 9 日に梅雨が明けた平成 30 年に、水田の渇水による稲体活力低下や果菜類の日焼け果多発、白ねぎ等夏秋作の大幅な生育遅延が発生しています。

今年度は更に早い梅雨明けという異常事態の中、前回の教訓を生かし各地域の状況に応じた農作物の適切な管理に努めてください。

→< H30 年度と比較した気温の推移（金沢地方気象台 アメダス金沢） >



II 農作物の管理対策

- (1) 水田の用水不足が心配される地域、特に用水をため池に依存している地域では、漏水がないか確認するとともに、集落や地域単位で計画的な水利用に努める。なお、関係機関との連携を密にし、ため池の状態を継続的に把握する。また、このような地域では強

い中干しは避け、飽水状態を保つ水管理とする。

- (2) すいか、かぼちゃ等の果菜類では、草勢に応じた着果数とし、果実肥大の促進に努める。
- (3) 花き類は発蕾期であり、日中の葉のしおれがある場合、夕方の涼しい時間帯にかん水を行う。
- (4) 果樹では、高温・干ばつ状態が続くと果実の日焼け・肥大不良や樹体の衰弱を招くので、かん水を行うとともに、土壌の乾燥状態を防ぐため、敷き草や敷きわら等のマルチを行う。
- (5) なお、病害虫の発生状況等については、令和4年6月16日「令和4年度病害虫発生予報第3号」を参考にして下さい。

Ⅲ 農作物の被害防止対策

(1) 水稻

- ① 用水の不足が心配される地域では、漏水がないか確認するとともに、計画的な水利用に努める。また、強い中干しは避け、飽水状態を保つ水管理を実施する。
- ② ほ場内への効率的な入水を実施するため、溝切りを行う。溝切り間隔はほ場条件に応じ3～5mとする。
- ③ フェーンが予想される場合は事前に通水し、十分に水分を補給しておく。塩水が流入する可能性のある用水は、塩分濃度が0.1%以下（EC 2.0mS/cm）であることを確認の上、使用する。
- ④ 穂肥施用にあたっては、高温条件下での稲体活力維持のため、地域の基準量を目安に適切に施用する。なお、今後出穂期が現在の予想より早まる可能性があるため、適期を逸しないように稲体を良く観察し、遅くとも出穂7日前までに終了すること。

(2) 大豆

〈既に播種済みのほ場〉

- ① ほ場の乾燥が著しく、播種後7日以上たっても出芽が不足しているほ場では入水を行う。
- ② 入水は、ほ場全体の田面が湿る程度に気温の高い日中を避けて朝夕に実施し、入水後は速やかに排水する。

〈これから播種予定のほ場〉

- ① 耕起後は、土壌の表面が急激に乾燥するので、耕起はできるだけ播種直前まで行わず、耕起と播種を同日中に行う。
- ② 播種後も乾燥が続くと予想される場合は、通常よりやや深めの播種深度とする。ただし、5cm未満とする。

(3) 野菜

① 施設野菜（雨よけ栽培含む）

ア 高温障害（日焼け、落花、裂果等）を防止するため、軟弱野菜やトマトではハウスの屋根部分を遮光資材や石灰水溶剤により遮光する。

イ 猛暑日などで高温による萎れが発生した場合は、頭上から噴霧散水して植物体やハウス内の温度を下げる。頭上散水のない施設で萎れが著しい場合は、動力噴霧器または簡易スプリンクラーを利用し、噴霧散水する。

ウ トマト等では高温乾燥により石灰の吸収が悪くなり尻腐れ果が発生しやすくなるので、カルシウム剤の葉面散布を行う。

エ 敷きわら、ポリマルチなどにより土壌水分の蒸発、地温上昇を抑制する。

② 露地野菜（すいか、かぼちゃ、ねぎ、さつまいも）

ア かん水は、早朝または夕方の気温が低い時間帯に行う。また、敷きわら、白黒ダブルマルチなどにより土壌水分の保持、地温降下を図る。

イ 果実の成熟は積算温度で概ね決定されるため、平年より早まる場合が多い。試し切りを行い、過熟にならないように留意する。

ウ 適切な適果・摘心などにより、適正な着果数や生育量を保つ。

エ 土壌の乾燥により微量要素の吸収が悪くなるので、微量要素入り液肥を散布する。

オ 果菜類では高温により日焼果が発生しやすくなるため、日除けテープ等を貼って日焼けを防止する。

カ ねぎの土寄せは吸収根を切り草勢の低下をまねきやすいので、高温期の作業を避ける。

キ 害虫（ハダニ、スリップス、オオタバコガ等）が発生しやすいので、発生動向に注意し初期の防除を徹底する。

(4) 花き（きく）

① 下葉が萎れ始めたらうね間かん水を実施する。かん水は夕方に行い、水位はうね高の半分程度とし、うねの表面が湿ってきたら速やかに落水する。

② 水揚げは水が腐りやすいため通常よりもこまめに替え、十分に水揚げさせてから箱詰めする。

③ 萎れている時や高温時の薬剤防除は薬害を起こしやすいので、かん水後、十分に萎れが回復してから、気温が低くなった夕方に防除する。

④ 害虫（アブラムシ、ハダニ、スリップス、オオタバコガ等）が発生しやすいので、発生動向に注意し初期の防除を徹底する。

(5) 果樹

① ハウス内の温度管理

ア ぶどう、いちじく等のハウス栽培では、ハウス内の高温による日焼け等生育障害を招きやすいので、上部も換気し、高温にならないよう適切な温度管理に努める。

② かん水等による土壌水分の管理

ア 高温時には、樹体からの水分蒸散が激しくなるので、高温状態が長期

間続く場合はかん水を行う。かん水量の目安は、5～7日間隔で1回20mm程度とする。

イ かん水施設がない園では、少量の用水で効果が期待できる簡易な点滴かん水を行う。

ウ 清耕栽培園などの乾燥が著しい場所や根の浅い場所では、土壌からの水分蒸発を防止するため。敷き草や敷きわら等のマルチを行う。

エ 草生栽培園では、雑草との水分競合を避けるため、草丈20cmを限度に除草するものとするが、地表を裸地化するとかえって園地の乾燥を助長するので、極端な低刈りは行わない。刈草は樹冠下のマルチに利用する。

③ 摘果による樹体管理

ア 日本なし、りんご、かき等では、果実肥大期に高温、乾燥が続くと果実肥大が不良となる。摘果で結果量を早めに調節し、果実肥大を確保する。

④ 病虫害防除

ア 高温・乾燥が続くとハダニ類の多発が予想される。随時園内をまわりながら葉裏のハダニを確認し適期防除に努める。

イ 高温・乾燥状態が長いと樹体の衰弱から葉害が発生しやすくなるため、防除の際は散布濃度に注意し、朝又は夕方の涼しい時間帯に行う。

(6) 家畜・飼料作物

① 暑熱時は、飼育密度を緩和する。

② 畜体等への散水・散霧により、家畜の体感温度の低下を図る方法としては、扇風機とスプリンクラーを使用して冷やす直接的蒸発クーリング法と、噴霧器などで大量に霧を発生させ、これを気化させて体感温度を下げる間接的蒸発クーリング法がある。いずれの方法も、敷料が濡れて雑菌が繁殖し乳房炎の増大や給与した飼料の変敗を助長する恐れがあるので過湿を避ける。

〈過湿を避けるための注意点〉

スプリンクラー(0.5～3分)とファン(12～14分)を交互に作動させる。

散水した水や噴霧器による霧が速やかに気化するようファン能力に注意する。ノズル8～15リットル/分の能力で半径240cm程度へ散布。通路方向に平行に有効到達距離(ファンの直径の10倍)ごとに設置する。

③ 寒冷紗やよしずによる日除け、畜舎周囲の植林、畜舎内外の散水・放水により畜舎内温度の低下に努める。

④ 嗜好性、養分含量の高い良質粗飼料および新鮮な水を供給する。特に、乳牛では、消化の良い良質粗飼料を準備し、早朝、晩の涼しい時期に給与するとともに、バランスの取れたミネラルの補給やビタミン類の添加を行う。豚や鶏では、油脂などの栄養価の高い飼料の給与やビタミン類の補給により、体力低下の防止に努める。

⑤ 草地については、過度の低刈りおよび短い間隔での刈取りを避ける。特に、混播牧草は高温乾燥に弱いため、降雨後まで刈取りを延期するなど株の枯死防止に努める。やむを得ず刈取る場合でも10cm程度の高刈りとする。

⑥ 水田等、かん水可能な飼料畑では、間断通水を実施する。